

兵役が大学生活を変える

石川拓己

大学 2 年生の春、キャンパスに彼らの姿はない。ほとんどの学生は気が付かないかもしれないが、確かにそこにいるはずの彼らはいない。韓国人男子学生たちは、大学を 2 年間休学し兵役のために母国へ向かった。彼らが再び日本に帰ってくるとき、共に入学した友人たちは大学 4 年生になり就職活動をしていることだろう。

「日本の友人に、私が兵役のために帰国しなくてはならず、そこには選択肢がないことを驚かれた。」

韓国人留学生の Lee ChangYong は言う。同じクラスであっても、韓国人の友人が多くなければ同級生が軍隊に行く義務があるということを理解している学生は少ない。日本人の大学生の多くは、自国のすぐ近くにまだ戦争が終わっていない国があるということすら、ほとんど意識することはない。

陸軍であれば最初の 5 週間で新兵訓練を行い、その後部隊が決定し 21 か月の間軍人として生活をおくる。月に 1 度ほどの外出許可や合計 28 日間の定期休暇などが法律で定められているほか、最近ではインターネットの利用が一部可能になったが、依然として制限された厳しい環境であることは間違いないだろう。

「時間が惜しい。」

1 番勉強できる時期に軍隊にいて頭が固まってしまうことを、韓国人留学生の Park Jeonyong は強く残念がる。大学 1 年で学習したことや覚えた日本語は、どうしても忘れていく。復学後、新たに「同級生」となる友人を作り直すことへの心配も、彼らの中にはあるはずだ。

人口が少なく、北朝鮮に徴兵制がある以上、韓国では自分の国を守るために男性が軍隊にいかなくてはならない。それは国民の義務であり、彼らは誇りを持っている。子供のころからわかっていた「当たり前」を、Park はポジティブにも受け止めている。

「人はいきなり難局にあうと克服することは難しい。軍隊にいてきた人たちは、精神的に強くなっているから、今後そういう場面を乗り越えることができると思う。」

徴兵制度の受け止め方は世代、性別によって様々だ。しかし、国家を守るための制度が学生たちの人生を翻弄することはずっと続いてきた。彼らが親となり子を持つとき、兵役はどうなっているだろうか。これまで以上に、皆が想像力を働かせ、行動をしなくてはならない。Park がいうように答えは明らかなのだ。「国家が統一されて平和になり、徴兵制がいらなくなるのが一番望ましい。」